
空と海と密との出会い

景雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空と海と密との出会い

【Nコード】

N7015X

【作者名】

景雲

【あらすじ】

他サイトとの重複投稿です。

空海^{くうかい}。後に弘法大師^{こうぼうだいし}と呼ばれ、真言密教を世に広めた偉大な僧侶。しかし彼は若い頃過酷な山岳修行に身を投じていた。そんなとき、一人の海女^{あま}と出会い、恋をする。

おわび

この物語は、真言宗の開祖、弘法大師こうぼうだいし空海くうかいのお話です。

しかし内容の中心は空海の恋愛です。

空海は僧侶なのに恋愛をしたのか！？と思われるかもしれませんが、このお話はほとんどが私めの勝手な想像であることをここに明記しておきます。

つまりこのお話はフィクションです。

実際に空海が恋愛をしたことがあるのか、それは私は存じません。勝手な想像で書いたお話です。

皆様もご存じとは思いますが、空海は真言宗の開祖です。平安時代初期に最澄さまとともにそれまでと違う新しい日本仏教の道を開きました。中国に留学し、密教みつぎょうを学び、帰国後その教えを全国に広めた偉大な僧侶です。

今日空海は、お大師さんと親しまれ、その伝説の数は膨大です。

実際空海は、仏教のことだけでなく、様々な分野でご活躍なさいました。

そのことに敬意を表しつつ、彼の人間的な部分を書けたらいいなと思っております。

このお話はフィクションです。私の勝手な想像です。ですからもしお読みくださった方の中に、真言宗のご住職様、僧侶の方々、並びに仏教関係者の方々、またはお大師さまを崇敬なさっておられる方々がいらっしゃいましたら、不快に思われるかもしれません。

もし、このお話が、空海という偉大な人間をぶち壊してしまうようなものだと感じになられるのであれば、どんどん批判してください。

場合によっては書くのをやめます。「書かないでくれ。」と批判されれば、なおのことやめます。

尚、執筆にあたり、以下の文献を参考にさせていただきました。

空海 著 上山春平 訳
倫理、歴史の教科書など

『三教指帰』
さんきょうしき

序章

険しい山道を、一人の僧侶が息を弾ませて歩いていく。手甲に脚絆、菅笠、右手には鉄輪かなわの落ちた錫杖しゃくじょう、左手に数珠を持つ。一見すると貧しい庶民に見えてしまうような旅装束で僧侶姿をしている彼のその灰色の衣は、破れかぶれであった。腰には縄を帯代わりにしていた。茅かやで編んだ蓆せを持ち、縄床じょうしょうつまり縄製の椅子を背負っている。腰には口の欠けた水瓶みずがめをさげていた。錫杖をつく平袖ひらそでから見える腕は細く、ここ数日ろくに物を口にしていなことが明らかである。

彼は、足を止めた。その先は道がなかった。進むためには草を掻き分け、土を固めてなんとかして歩けるような道を作らなくてはならない。

そんなふうにしなながら、彼は山の中を歩いてきた。ある行法ぎょうぽうをしながら。行法とはすなわち、經典の作法に従って読経したり、滝に打たれながら座禅を組んだり、と、そういうことで、彼が行っているのは『虚空蔵求聞持法』という行法である。

ともあれ、彼にはもう、道を切り開く体力が無かった。肩で大きく息をしなながら、

「何をしているんだ……、おれは。」
とつぶやいた。

彼は後ろを振り返った。鬱蒼うつそうとした木々が繁る山の中である。いつ、狼や猪いのししなどに襲われるとも限らなかった。

―引き返して別の道を探そうか。
彼は思ってゆっくり首を振る。すでに足が思うように動かない。それだけ疲れている。ぼろぼろになった脚絆をしめ直し、同じくぼろぼろの草鞋わらじを履き直す。足袋ももう原型を留めておらず、素足が見えかくれしていた。

彼は野草の繁るその場に座り込んだ。腰に巻いた縄に下げた水瓶

から水を少しだけ飲む。

彼の瞳は虚ろである。しかしながらその奥には確かな強い意志がある。それに気づく者はまれであろうが。

だが彼は、自らこのような生活を望んだのだ。

彼の名前をキョウカイ教海という。もっともこの名前はそうめい僧名、すなわち僧侶の名前であって、本名を、さいきのまお佐伯真魚といった。教海という名は自ら付けた。真魚は、しやういづ私度僧だからだ。私度僧とは、正式に僧侶となるための戒壇かいだんを受けていない、言わば勝手に僧侶を名乗っている者のことである。

真魚は宝亀ほうき五年、西暦でいうと七七四年、日本の讃岐さぬきの国、つまり今の香川県に生を受けた。彼の家は由緒正しい豪族ごうぞくの家であり、真魚は両親や親戚の期待の星であった。よく勉学に励み成績が優秀だったのだ。

それで真魚は、十五歳のとき、奈良の都、平城京へと上京した。そこには母方の叔父、阿刀大足あこのおおたりが待っていた。

すでに奈良は都ではなくなり、今の天皇がそれより北の長岡というところへ遷都をしていたが、まだ新しい都が完成していない。

だから旧都で真魚は叔父に勉学の師事をした。叔父の大足は、天皇の第三皇子、伊予親王いよののみこの侍講じこうを務めている学者である。侍講とは、皇子の先生のことである。この学者から、真魚は儒学を学んだ。

まだ十五歳の彼にしては驚くべき優秀さで、大足は仰天おおたりして舌を巻き、将来この童わらしは必ずや立派な国官となるであろうと想像した。

真魚もまた、この師を尊敬し、その教えによく耳を傾け、よく勉学に励んだ。

そして真魚が十八歳になると、旧都の大学に入った。

ここでも彼の優秀さは発揮された。たかだか地方の豪族の子が、成績がいいからって調子に乗るんじゃない、と同じ学生たちに罵ののしら

れても、

「そんなこと知らんよ。」

と、真魚は一蹴した。この時代には明確な身分制度がある。真魚の父親の身分は豪族ではあったても、決して高くはなかったがため、その子、真魚も同様の身分差別を受けた。

「たかが田舎から出てきた地方の豪族が、都の大学でゆ〜しゅ〜な成績を納めているだって？」

「俺たちを舐めるんじゃないよつ。」

「いいか？お前の身分は私たちのずっとずっと下なんだよ！生意気にも私たちの成績より良い成績をとるんじゃないよ。」

こんな言葉をはかれながら、暴力をふるわれたこともある。

それでも真魚はくじけなかった。

差別を受け、悪口を言われ、罵声ばせいを吐かれ、時には殴られ、蹴られ、叔父に心配をかけても、一身に勉強した。

そんな真魚を叔父も父も母も、親戚一同も、良くできた子だとはめ、将来を期待した。佐伯家を継ぎ、国官となって朝廷に上がることを。

真魚が大学に入って一年が経とうとしていた。

いつものように書籍を片付け、学舎の庭から出ようとしたとき、思いもよらないことが起こった。

真魚は突然誰かに背中を蹴られた。いつもの身分差別か、と思いつつ淡々とした態度で、落として散らばってしまった書籍を拾おうと身をかがめたところだった。頭から水が降ってきた。

真魚は目を見開いて呆然ぼうぜんとなってしまうた。その耳に、妬みねたを含んだ声がいくつも響いた。「……いつまでも調子に乗ってっ。」

「どうしてこんな田舎者が大学にいられるんだ！」

そんな声が五、六人分あった。

水でびしょ濡れになってしまった自身の書籍を、真魚はしばらく眺めた。

すると誰かの手が、真魚の一番大事な書籍を取り上げた。それは半分ほど水に濡れていて、角から雫が滴り落ちる。

「あ。」

真魚はそれに目を見開いた。構わず書籍を取り上げた手は、頭よりも上に上がる。真魚は書籍を追うように手の人物を見上げた。

「返してほしいか？」

恨めしい目つきで彼は言った。真魚は、正直に言う。

「返してください……。」

しかし彼は書籍を手放さない。こうしている間にも、書籍は水で崩れそうだった。真魚は焦る。立ち上がって彼の手にすがった。

「返して。」

しかし真魚の腕は彼のそれより短く、手が届かずに書籍を取り返すことができなかった。真魚は、自分でも思いがけないことに、涙が出た。それはいったん流れ出ると次から次へと頬を伝ってゆく。そんな様子の真魚を見て、彼はなんとも言えない笑みを浮かべた。

「おい、泣いているぞ。」

誰かが言った。しかしその言葉には哀れみがなかった。

書籍を取り上げた彼は、その瞬間それを地に叩きつけた。書籍は無惨にも使い物にならなくなってしまった。真魚がそれを見て泣きながら呆然となっている間に、彼らは走り去っていった。真魚はその場にうずくまった。そして地に向かって大声で叫んだ。

一章

旧都、奈良の平城京は碁盤の目をした四角い街である。その真ん中を南北に幅広い通りが通っていた。これを朱雀大路すざくおおじと言う。

真魚まおはその朱雀大路に走り出た。抱えているものは水に濡れた書籍、半ばうつむきかげんで空気を突っ切るようにして走った。頬ほほに涙を流しながら。

今まで、身分差別など気にも留めなかった。しかしそれは表面上だけのことであって、心は傷ついていたのかもしれない。涙が止めようもなく流れてくるのはその証だ。真魚は今までつらくて悲しくて苦しかったのだ。今になってやっとそれを自覚して、真魚は心の中がなぜかすっきりしてきた。それは涙とともに気持ちが軽くなっていくものだった。

朱雀大路を走り抜けて、ふと惹ひかれるように東側の街路に入った。都は朱雀大路を堺うきように西側を右京、東側を左京さきようと言う。逆ではないかと思われるが、そうではない。一番北の真ん中に位置する平城宮へいじょうきやうから見て、つまり天皇から見て、右京、左京と言うのである。北を背にできるのは天子のみ、つまりこの日本でいうと天皇のみなのである。

その左京の通りに入ってしばらく歩くと、真魚はびたりと足を止める。

狭い通りだった。その両脇にたくさんの人が疲れたように横たわっている。彼らはみんな破れかぶれの衣服をまとい、それからのぞく手足は棒のように細く、頬そは削げ、眼には生気がなかった。

真魚がそこをゆると通ると、彼らの半分以上が一斉に手を伸べてきた。その手は掌てのひらを上に向けている。そして彼らは落ち窪くぼんだ眼で真魚を見上げてきた。

ものごいをしているのだ。

都は北へ向かうほど貴族の華やかな邸宅が並び、一番北の真ん中には天皇の宮殿である平城宮があるが、南へ下るほど建物は粗末になり、貧しい庶民が住んでいる。

だがまだ家がある者は良いほうでそれさえもない人々がいた。

そんな彼らは道端に横たわり、富める者と思われる人が通ると手を伸べて食をじきをこうのである。

そうやってやっとの思いで生きている人がいる。

真魚は彼らを哀れに思ったが、あいにく食べ物を持っていないし、持っていたとしてもあげることができない。あげたところで、たくさんものごいが群がってくるからだ。

それで真魚は彼らに痛ましい視線をなげつつ通りを歩いた。

やっとそこを抜けて顔を上げると寺が見えた。

通りの一角に山門がひっそりと建っている。真魚は惹かれるようにその寺へ向かって歩いた。

寺の山門を見上げると、扁額へんがくが掲かげてある。それにはこう書かれていた。

『大安寺』
だいあんじ

真魚はその文字をまじまじと見てから、山門の手前で大安寺という寺に向かって一礼し、ゆくりと歩を進めた。

山門を抜けたとたん、空気が変わった。変わったような気が、真魚にはした。

—ここは、どこ？

真魚は思って苦笑しながら首を横に振る。

もちろん、大安寺、というお寺なのだ。おもむろに境内を見回してみても、その空気を感じとる。真魚は不思議な心地がしてもう一度思う。

—ここはどこ。

このお寺は、どこか何かが違う気がした。不思議で神秘的な気配が

してならないのだ。

真魚がきよろきよろしていると、静かな声がした。

「どうかなさいましたか？」

弾かれたように振り返ると、本堂の前で一人の僧侶がひっそりと立っていた。真魚は彼をまじまじと見つめる。僧侶はわずかに微笑んで、首を傾けた。

「水か何かに濡れているようですが、今日は雨は降っていませんね？」

問われて、真魚は恥じ入るようにうつむく。「あの、申し訳ありません。これには少し、訳がありまして……。」

言うと、僧侶は近づいてきた。真魚はその僧侶を見る。見える年の頃はよく分からない。若いようでもあり、壮年のようでもあった。ただ、その顔に浮かぶ微笑みは不思議な感じがしていた。

「ここのお寺のお坊様ですか？」

真魚が聞くと僧侶は静かにうなずく。そうして真魚が抱えている書籍に目をやった。

「これは、どうしたのです？ 貴方ごと濡れてしまったのですか？」

「はい、あの、事故にあって……。」

真魚は眼を左右に動かしながら答えた。正直に言いたくなかった。しかし僧侶はうなずいただけでそれ以上何も問うてはこなかった。それで真魚は安堵する。

すると僧侶は腕を差しのべて、真魚の背を軽く押した。

「おいでなさい。このままでは風邪をひいてしまいます。それにその書籍も完全に、とは言えませんが直して差し上げましょう。」

真魚は目を見張り、そして首を横に振る。しかし僧侶は静かに笑って、真魚を本堂の裏の僧坊そうぼうへと導いた。

僧坊は僧侶が住む建物のことである。ここで僧侶たちは寝起きしているのであった。

真魚はその一室に連れていかれた。先に行く僧侶はその部屋を示して言う。

「どうぞ、狭い部屋ですがお入りなさい。」

「このお部屋は？」

「私の書斎ですよ。さあ、どうぞ。」

僧侶は微笑んで、緊張する真魚を促した。

その書斎は僧侶の言うとおりに決して広くはなかった。目の窓から入る陽の光りがその床を照らす。窓の脇には机と椅子が置かれていた。そして机には経典らしき物が置かれている。

真魚に続いて僧侶も入ってきて、書斎の隅にあったもう一つの椅子を机の近くへ寄せてきて、真魚に座るよう示した。真魚は恐る恐る腰を下ろす。

僧侶はそれを見てとって、にこりと笑んで自らも机の前の椅子に腰かけた。

真魚はその僧侶と向かい合わせに座る形になった。

「まだ名乗っていませんでしたね。」

僧侶は言って、立ち上がる。

「私は勤操と申します。」

名乗って、丁寧に一礼した。真魚も慌てて立ち上がる。

「あ、わ、わたしは、真魚と申します。佐伯真魚です。」

勤操はにこりと笑んだ。

「左様ですか。真魚どのですね。」

「：呼び捨てで結構です。」

真魚が上目遣いに言うと、勤操は笑って静かに椅子に座った。

「では、真魚？」

「はい。」

「お座りなさい。そして書籍を。」

言われて真魚は水を含んだ書籍を見る。恐る恐る、勤操に差し出した。

勤操は真魚の書籍を、腫れ物に触るように受けとり、脇の自らの

机に置く。そうして真魚を見て、微笑んだ。

「着替えていらっしゃい。弟子を呼びますから。」

言って、勤操は立ち上がって書斎の入り口へ向かう。廊下に顔を出して人を呼んだ。

すぐに軽い足音が聞こえてきて、年若い僧侶が書斎の入り口にやって来た。真魚は彼に託され、書斎から出ていった。

若い僧侶に体をふいてもらい袍（着物）を着せられると、真魚は再び勤操の書斎へと導かれた。

書斎に入ると、勤操は熱心に机に向かっていて。真魚が声をかけると振り向いて笑う。

「もう冷たくはありませんか？」

聞かれて、真魚はうなずいた。

「ありがとうございます。」

深く頭を下げ、首を傾げた。

「あの、わたしの書籍は？」

聞くと、勤操は微笑んで机の上を示す。そこには真魚の書籍が一冊ずつ並べられ、その一つを勤操は丁寧に紙面をめくって、隣に置かれた紙に書写していた。

「この書はずいぶん濡れておりまして、半ば崩れかけていますね。ために全ての文を読むことができないのです。ですがなるべく一字一文字拾ってみますね。」

勤操が書写していたのはあのとき地に叩きつけられた書籍だった。真魚はそれを見て、辛くなる。唇を引き結んだ。目頭が熱くなり、また涙がこぼれそうになる。

真魚の返事がないのを勤操はどうしたのかと思ったらしく、彼は真魚を振り向いた。

「：いかがしました？」

やわらかく問われ、真魚はますます泣きそうになる。それをぐっとこらえていると、勤操は再び机に向かった。

「お座りなさい。今日はこの書籍だけでも書写してみましよう。もつとも全ては無理ですが。」

何があったのか聞いてこない勤操に不思議に思いながらも、真魚は椅子に座ってじっとしていた。

すっかり夕暮れ時だった。真魚と勤操は境内にいた。

「ありがとうございました。」

真魚は書籍を抱えながら勤操に向かって深く頭を下げた。

「いいえ。結局全て書写できなくて申し訳ありません。」

「いいえ。これだけ直してもらえたらもう充分です。」

真魚は若干声を大きくして言った。それは本心だった。

他の書籍はともかく、地に叩きつけられた書籍はまだ途中までしか学べていなかったのだ。その途中から所々脱字があるとはいえ、最後まで書写してくれたのは本当にありがたかった。

真魚は勤操の微笑みを見て言った。

「またこのお寺に参っても良いですか？」

真魚は大安寺が気に入り、勤操の為人に、今日初めて会ったというのに、ひかれたのだ。勤操は碎顔して言った。

「どうぞ。いつでもおいでなさい。そうですね、次は何か、ああ、甘い糖とうでもご用意しておきましょう。蘇そも食くしてみたいものですが、高価ですし私たち僧侶は食べられませんから、残念です。」

蘇とは乳製品で、現代で言うチーズのようなものである。殺生せつしょうを禁じている仏道に帰依きえする者は、当然ながら食べられない。しかしながらどこか楽しそうに言う勤操は、真魚を歓迎しているようであった。真魚はうれしくなって眼を輝かせた。

「本当にありがとうございます。」

言って、軽く頭を下げて大安寺を後にした。

おわび二

作中に出てきた大安寺ですが、申し訳ないことに私は参拝したことがございません。ですから境内の様子がまるで分かりませんので、適当に書いて適当にはしよらせて頂きました。大安寺のご住職様、僧侶の方々、並びに関係者の方々にこの場をもってお詫び申し上げます。申し訳ございません。

それから真魚（空海）が通われていた大学ですが、京都の大学に入学したといくつかの本には書かれておりました。ですが作中ではお話の都合上、奈良の大学にいたしました。なにとぞご了承下さい。尚、ここまでで、以下の文献も参考にさせて頂きました。これ以外にも参考にさせて頂きます。

河原由雄 監修 『仏像の見方見分け方百科』

歴史群像シリーズ特別編集 『古代天皇列伝』

二章

あれから三日後の朝、真魚は大安寺だいあんじの僧、勤操ごんそうが書写してくれた文を読んでいた。真魚はその流麗な文字を目で追っていく。

先日、帰りが遅くなったので叔父の大足おおたりに心配をかけた。何があつたか聞かれたので正直に話した。ただ、大安寺に行ったことだけを除いて。半分駄目になった書籍については親切にしてくれている大学の先輩が書写してくれたのだと言っておいた。真魚には本当に懇意こんぎにしている大学の先輩がいたので大足はあつさり真魚の言うことを信じた。

それにしても、と真魚は思う。大足は仏教があまり好きではない。なぜなら既存の仏教は政に近づきすぎているからである。しかも賄賂まわくりごとを引き受ける僧侶もいるのだ。そもそも天皇がそのことを理由に良く思っていないのだから、朝廷に仕える大足が良く思うはずがない。毛嫌いしているわけではないそこに仏様がおられれば大足は拝むが、今の仏教の有り様を快く思っていないのは確かだ。

まるで正反対のようだと真魚は思った。大足の姉、つまり真魚の母は熱心な仏教信者である。おかげで真魚は幼い頃から母に、釈迦の教えは尊いのだ、と教えられてきた。

真魚はふと思いついて大足の部屋に行こうとする。本日は大学は休みであつた。机の上で書を丁寧ていねいにたたんで席を立った。

大足は部屋で書籍に埋もれていた。声をかけると書から顔を上げて碎顔はがんした。

「おお、真魚。先日はひどい目に遭あうたな……。じゃが気にすることはない。お前は何も悪いことなどしておらぬのじゃから。」

「叔父上とお話したいのですが。」

言う、大足はそこに座れと床に敷いた氈じゅうたんを示した。それで真魚は

大人しくそこに座る。

「：叔父上、今の主上はもう長岡京にお移りになられておりますよね。」

主上とは天皇の尊称である。天皇は延暦三年、西暦で七八四年十一月に、長岡京へ移っている。平城宮に主はすでに存在しなかった。大足は真魚と面と向かって座った。

「そのとおりじゃが？」

「それは何故だと思われませんか？」

聞くと、大足は眉をひそめた。

「奈良の仏教が政界に近づきすぎたからじゃよ。」

案の定真魚の予想通りの答えが返ってきた。真魚は大足の眼をひたと見る。

「ですが、それ以外の理由のほうが大きいです。」

「ふむ？」

大足は片眉を上げる。真魚は話を続けた。

「主上は新たな皇統の樹立を宣言なさいました。それは、主上の始祖を天智天皇でもなく天武天皇でもなく、さらに聖武天皇でもない、先帝の光仁天皇であるとし、これを天命であるとして、ご自分の息子たちを皇統の起点になさろうとしております。それ故に遷都を断行なさったのでは？平城京と：、ご自身の皇統を解き放つために。」今の天皇の、皇統の起点にしようとしているという息子たちは二人いて、天皇はその二つの皇統から交互に天皇を立てようと考えているのであった。その二人の息子の諱、つまり名を兄のほうを安殿、弟のほうを神野といった。二人は同母兄弟で、母親は皇后の藤原乙牟漏である。ちなみに風聞で仲の良い兄弟だと言われている。

兄の安殿親王はすでに立太子して皇太子となり、天皇の後を継ぐことが約束されていた。

大足はふむ、と考え込んだ。そして一つうなづく。

「なるほど。やはりお前は賢い。真魚よ。私は伊予親王にお仕えしておるが宮中に詳しいわけではない。ましてや主上のお考えをはか

り知るなどもつてのほかじゃ。できるわけがない。しかしこれだけは良く覚えておきなさい。」

大足は姿勢を正した。「真魚のお仕えすべき主君は、安殿皇太子じやぞ。そのお方に忠義を持ってお仕えし、そして親に孝行をするのじゃ。これこそが儒教の、あらゆる道徳の出発点であるぞ。」

真魚は大足を見返しつつ姿勢を正し、はい、と返事をした。それを見て大足は笑みを浮かべる。

「お前なら立派な官吏になるじやろう。出自の問題など乗り越えてな。」

そう言った大足に、真魚は無言で頭を下げ、彼の部屋を後にした。

朱雀大路は案外賑わっていた。もう都ではないのでさすがに官吏の姿は少ない。それでもちらほら見える。

真魚は昼の朱雀大路を通る人々を見て、なんと分かりやすいのだろうと思う。貧富の差が一目瞭然なのだ。貧しい人々は着たきりの木綿の衣服を着ているし、豊かな人々は絹の衣服を着ている。

官吏さえも一律の官府ではなく、色が違う。高官は紫の官府を着用し、下官となると薄い枯れ葉のような色の官府を着用している。女もまた、色鮮やかな領巾ひれや裳もを着用している者もいれば、地味な色合いの上下を着用している者もいた。

真魚は、大足に東市に行くと行って、その実大安寺へ向かっていた。いつでも来てよいという勤操の言葉に甘えようとするのである。さすがに手ぶらではないけないと思い、店で橘たちばなの実を買った。橘はミカンの原種である。その昔遣唐使が唐とうより持ち帰った果実だと聞いた。

大安寺へ向かう左京に入った。

しばらく歩くと先日と同じく道端に貧しい人々が横たわって、真魚に向かって手を伸べてきた。真魚はそこをなんとかやり過すごし、大安寺の山門に着いたときには大きなため息をついてしまった。――いったいどうして、あんなに貧しい人がいるのだろう。

自分は決して貧しくはないのに。

真魚は山門の手前で合掌し、一礼する。門を潜り抜けるとやはりお寺は神秘的な感じがした。

本堂の前で合掌し、裏手に廻る。

僧坊の前ではすでに勤操がひっそりと立っていて、真魚へ笑顔を送っていた。

真魚は驚いて彼のもとへ駆け寄った。

「…何故？勤操さまはわたしが来ることをご存じだったのですか？」
眼を見開いて聞くと、勤操はただ微笑んだけだった。

真魚はとにかく挨拶して、懷から二つの橘の実を取り出す。

「これをどうぞ。せめてもの土産として買って参りました。」

言って、勤操に差し出すと彼は笑って受け取った。

「ありがとうございます。まずはご本尊様にお祀りさせて頂きましよう。さあ、どうぞ中へ。」

勤操に促されて真魚は僧坊へ入った。案内された部屋はちよつとした広間だった。

「少し待っていて下さいね。」

勤操は言って、広間から出ていった。

真魚は広間を見渡す。陽の光がよく入る部屋だった。床はきれいに磨かれており、扉の前に置かれている屏風びやうぶには、唐の国の人とおぼしき人物が描かれている。天井を見上げると、領巾ひれをまとわりつかせた古代天竺インドふうの衣を着た者が二人、空を飛ぶように優雅に描かれていた。その色は赤や青の五色ごしきである。しばらくして勤操は戻ってきた。脇しきものに氈を抱えて、茶器を持っている。彼は氈を床に敷きはじめたので真魚はお茶の用意を手伝った。

氈の上で勤操と面と向かって座る。彼は真魚と自分の分の茶を杯に入れると、ちょうど二人の真ん中に置いた皿に糖とうを盛り付けた。とたんにほのかな甘い香りがする。

真魚はここまででもてなされると思っていなかったなので、少しばかり落ち着かなかった。

「：すみません。急に参ったのにここまで気を遣わせてしまつて。」
真魚が頭を下げて謝ると勤操はくつくつと笑う。

「構いませんよ。実はなんとなく今日真魚が来るのではないかと思つていたので。」

「そうですか。」

言つて、真魚は勤操の笑みを見た。

勤操は茶を勧めて自分も杯に口をつけた。真魚は茶を少し口に含み、味わってから飲み込む。茶の味が口の中に広がった。

「おいしいです。」

素直に感想を述べると、勤操は微笑む。

「糖もどうぞ。」

言われて、食べてみるとほんのり甘くて自然と顔がほころぶ。その様子に勤操は笑った。

「おいしいですか？」

問われて、真魚はうなずいた。茶の苦味と糖の甘味がうまく調和されていた。

穏やかな時間が流れる。真魚は天井の絵を見上げた。しげしげと見ていると、勤操が言った。

「あの二人は飛天ひてんと言います。」

真魚は勤操を見た。彼も天井を見上げている。

「ヒテン？」

真魚が問うと勤操は天井から目を離し、逆に氈を見下ろした。そしてその上に指で文字を書く。

『飛天』

真魚はその文字をしっかりと頭に刻んだ。勤操は説明する。

「飛天はお釈迦様の悟りを表す神だとされています。」

「飛天……。」

つぶやいて、真魚はもう一度天井の絵を見上げた。

「美しい……。」

そして思う。仏はどこにおわすのか？

真魚は勤操の瞳を見た。

「仏様は、どちらにいらっしゃるのでしょうか？」

勤操は少しばかり目を見開き、そしてすぐに笑んだ。

「お会いになりたいのなら、お連れしましょう。」

「どちらへ？」

「本堂へ。どうぞ仏様を拝んでください。」

三章（前書き）

残酷な描写があります。

三章

本堂は非常に広かった。そして何よりも真魚まおを驚かせたのはこの堂の空気だった。大安寺だいあんじの境内はどこか神秘的な感じがしていたが、ここはもつとすごかった。言葉にできない何かが真魚を包み込んでいた。その何かに真魚は身震いする。恐怖や悪寒などでは決してない。強いて言えば、歓び、というべきものであろうか。

勤操こんぞうは祭壇の手前に座り、ケイ子けいすを鳴らす。その莊嚴な響きが真魚を再び身震いさせた。

ケイ子の音が堂内に鳴り響くなか、勤操は仏に向かって静かに手を合わせた。真魚もそれにならう。

座って、合掌していると何故だか心が洗われるような気がした。

今、真魚が苦しんだり悲しんだり怒ったり哀れんだりしている一切のことが、合掌という行為によって流されていくようであった。

勤操は真魚に内陣ないじんに入することを許した。ゆえに真魚は仏像の一体一体を間近で拝むことができた。そして勤操は仏の名前や功德などを、一体ごとに丁寧に教えてくれた。

不意に、真魚は一体の仏像の前で立ち止まる。その仏を真魚は今まで見たことがなかった。それだけでなく、この仏に何故かひかれるものがあつた。

勤操が静かに言った。

「こちらは、虚空蔵菩薩こくうぞうぼさつといひます。」

「コクウ……？」

真魚はその仏と視線を合わせたまま、勤操に尋ねた。彼は説明する。

「虚無の虚に、青空の空、蔵くらと書いて、虚空蔵菩薩。」

勤操の言葉を聴きながら、真魚は虚空蔵菩薩から目を離さずじっと、硬直したようにしていた。

虚空蔵菩薩の姿は、観音さまのような服と装飾品を身に付け、左

手には如意宝珠にょいほうじゆのある蓮茎れんけいを持ち、右手は与願印よがんいんとし、頭に五仏ごぶつを表した宝冠ほうかんを頂く。

他の菩薩もこのように――持ち物や手の形などは違うが――、華やかな姿をしているのに、真魚にはこの虚空蔵菩薩が一番輝いて見えた。どうしてだかは自分でもよく分からない。

勤操はそんな真魚を見据えながら説明を続ける。

「この菩薩は、虚空のような広大無辺の知恵と慈悲をもって、衆生しゆじやうの求める様々な願いを叶えてくださると言われています。」

「虚空のような……。」

つぶやいて、真魚は虚空蔵菩薩の瞳を見つめ続けた。

と、真魚の脳裏に火花のようなものが散った。それは、予感だった。

――安殿皇太子ではない。

真魚は虚空蔵菩薩から目を離して軽く右手で頭を押さえる。

――何が安殿皇太子ではないのか。

心の中で自問する。すぐに答えが浮かんできた。――自分が仕える主君が、だ。

では誰に仕えるというのか。

「真魚？」

声をかけられて、真魚はとっさに我に帰った。勤操は心配そうに真魚の顔をのぞきこんでいた。

真魚は首を横に振る。

「申し訳ありません。」

言って、苦笑した。

「虚空蔵菩薩に見とれてしまいました。」

そう言っただけで勤操を見ると、心配してくれているのがよく分かった。だが、それ以外に何かの感情を顔に出していて、真魚は苦笑しながら軽く首を傾げた。

「勤操さま……？」

「：私の目もあながち節穴ではなかったようです。」

「：え：？」

真魚は勤操の顔をまじまじと見た。

勤操はその顔に笑みを浮かべていなかった。いつもは終始微笑んでいる印象を受けるため、真魚は正直不安になった。しかも勤操は、いつになく強い瞳で真魚を見据えた。

「貴方は――だ。」

言葉の一部が聞き取れなくて、真魚は眉をひそめた。

「勤操さま、何か？」

言うのと、勤操は真剣な表情で言った。

「真魚は、虚空蔵菩薩が気になりますか？」

それは真実だったので正直にうなずいた。それを受けて勤操も軽くなずいた。それは何かを了承したような仕草だった。

「では、仏教をどう思いますか？」

真魚は目を見開いた。あまりに唐突な質問だったからだ。

しばらく考え込んだが、答えが頭に浮かばない。だが心の奥底から仏の教えを求める気持ち、水底から泡が浮かんでくるように沸き出でてくるのがはつきりと分かった。

「わたしは、仏の教えを……。」

言って、真魚は勤操の瞳を目を見開いて見つめる。

「聴きたい……。」

我知らず、つぶやいていた。

勤操はしばらく真魚の漆黒の瞳を見続けていたが、やがて軽く息を吐いて笑んだ。

「左様ですか。」

ささやくように言ってから、彼は真魚を促しつつ本堂の入口へ向かった。

真魚は何故あのようなことをつぶやいたのか自分でもよく分からず、半ば放心状態だった。

それでも、入口で勤操にならって仏様に合掌し、本堂から出た。

「今日は、貴重な仏様を拝ませて頂き、誠にありがとうございました。」

山門で真魚は勤操に頭を下げた。彼はいつもの微笑みを浮かべていたが、その瞳には厳しさがただよっているのが分かった。

「……いいえ。真魚が、仏様を拜んで下さって、何より虚空蔵菩薩に感銘を受けてもらって、大変喜ばしく思います。」

「虚空蔵菩薩は……、何故だかひかれるものがあつたのです。」
言って、真魚は小さくため息をついた。

―それにまた、予感がした。

真魚は考えを振り払って、勤操を見た。

「とにかく、ありがとうございます。」

「真魚。」

柔らかくも厳しい声音に、真魚は驚いて勤操を見る。

「は、はい。」

「またこの大安寺においでなさい。」

「はあ。」

気の抜けた返事をする真魚に、勤操はわずかに眉をひそめて手を真魚の肩に置いた。

「貴方がここに来るときは、私は必ずここにおります。いつ何時に来ても、私は必ずおります。だからいつでもおいでなさい。」

言って、目を伏せた。

「もちろん貴方がここに来ることを望むのなら、ですが。」

再び上げた顔に笑みはなかった。ただ、真魚を真っ直ぐに見据えていた。

真魚は軽く息を吐いて、自分の心に正直になって言った。

「必ず参ります。」

真魚の率直な言葉に、勤操はわずかに微笑んだ。

すでに夕暮れ時だった。真魚は少しうつむきかげんで通りを歩いていた。まだ左京を抜けていない。

―自分が仕える主君が、安殿皇太子ではない。

大安寺で虚空蔵菩薩にみいられていたあのとき、確かにそう予感した。

真魚には、幼少の頃よりときどきこのような『予感』がするときがあった。

例えば十歳のとき、自分はいつか故郷を離れる、と感じた。それは何の根拠も理由もなかったのだが、その五年後本当に故郷を離れて平城京へ上がった。

そう、真魚の予感は大抵当たった。ゆえに、今度の予感もいつか当たるのかもしれない。しかし、主君が安殿皇太子でなければ、真魚はいたい誰に仕えるというのか？真魚の年代からして忠義を尽くす天皇は、安殿皇太子しか考えられないというのに。

思わずため息をついて足を止めると、突然左の袖を誰かにひっぱられた。

真魚は驚いて振り返る。痩せた女がうつむいて袖をつかんでいた。真魚は眉をひそめる。

すると女が顔を上げて真魚を見た。若い女だったが、痩せて髪も乱れている。着ている衣服も粗末だった。

女は瞳だけを光らせて、かすれた声で言った。

「ねえ、いいことしない？」

女の口の端が奇妙な形に上がった。真魚には女の言っている意味が分からなかった。それで首を傾げると女は何がおかしいのかくすりと笑った。

「あら、もしかして分からないかい？まだ“みづら”だものねえ。」言いながら、女は真魚の髪を細い指でひとなでする。みづらとは皇族や貴族などの童子（少年）の髪型で、髪の毛を二つに分け、それぞれ耳の位置で束ねたものである。真魚はすでに十八歳であり、そろそろみづらを解いて成人の髪型にしてもよいのだが、何となく機

会を逃して未だにみづらを結っている。だからか、年齢より下に見られることが多かった。

女は言った。

「でも大丈夫。あなたにとってはいいいことだけだから。」

真魚は女の言うことがまだ理解できなかった。すると彼女は真魚の袖をぐいと引っ張る。真魚は女に袖を引かれて訳も分からず物陰に連れてこられた。真魚は目を見張って袖から女の細い腕を引き剥がそうとする。すると女はまた奇妙な笑みを浮かべてその真魚の手をつかんだ。

「大丈夫だって。ここなら誰も見やしないからさ。」

言って、つかんだ真魚の手を自分の衣服の中に入れようとした。

その行為で真魚はやっと女の言葉と行動の意味が分かった。

「何をする！」

とっさに叫んで手を女の手から解いて二、三步下がった。

女は自分の身体を売ろうとしているのだ。そして代わりに食料をもらう。

その彼女は呆然としていた。

「：…なんでさ。あんたにとってはいいいだけなんだよ？」

「だからと言って：！」

「食べ物なんて少しくらい分けてくれたっていいじゃないか？ どうせ…、家に帰ったらまだたくさんあるんだろう？」

女はまばたき一つせずその瞳で真魚の瞳を貫いた。真魚には、返す言葉がなかった。

見合っていると、女が叫んだ。

「どうしてだい！ どうしてこの世にはあんたみたいな裕福な奴等と、あたしみたいな貧しい奴等がいるんだよ！」

真魚は胸をつかれて一つ肩を震わした。

「……………！」

女はふらつくようにして真魚にすぎる。細い腕が、真魚の成長期のたくましさを帯びてきた腕をつかんだ。そして涙のにじんだ瞳で真

魚を見上げた。

「ねえ…、いいだろ？娘がいるんだ。あたしたちは生きるために必死なんだよ。」

言って女は顔を歪めた。その表情は、悲しみというより、憤りに近かった。そして笑う。

「ははっ、おかしいよね。こんな死ぬ思いしながら男どもに体売って、それで生きなきゃならないなんてさ。死にたいぐらいつらいのに、こうでもしなきゃ食べ物にありつけないなんてさ。」

言って、女は目を見開いた。

「ああ、そうか…、それなら死んでしまえばいいのか。」

彼女の両目から涙があふれた。

「…生きてるのに、必死で生きようとしてるのに、死ぬほどつらいなら死ねってか？じゃあ、あたしたちは何のために生まれてきたんだ！娘は！？あたしたちがいったい何したっていうのさ！」

女は叫び疲れて肩で息をしている。真魚は彼女を見つめることしかできなかった。

やがて女は真魚から手を離れた。肩を落として去ろうとする。

「…悪かったよ…。」

言って、踵を返そうとした彼女に、真魚は腕を伸ばしてこちらを向かせた。女はうつろな眼で真魚を見上げる。

「なんだい……?!」

真魚は彼女を両の腕で抱きしめていた。歯をくいしばって、女の細すぎる身体を優しく抱きしめた。硬直して動けない彼女に真魚は抱きしめたまま、言った。

「…大丈夫だから…。」

「何が大丈夫、だ？」

ふん、と女は答えた。真魚は目をつむって彼女の温もりを感じとる。

「この人は生きている。そして。」

「仏が…、救ってくださいる。」

「…嘘だ。仏は限られた奴しか救わない。」

「それは違う。誰でも救ってくださる。何よりも…。」

真魚は言葉を切って、息を吸い込んだ。

「あなたの心の中に仏はいるのだから。」

女が体を震わせた。

「こ…ころの…中…？」

腕の中で、女はか細い声でつぶやいた。真魚の眼から一筋の涙が流れた。

「あなたの心に仏はおわす。だから、あなたはあなた自身を信じればいい。生きようとする心、娘を想う心、それがあなたの中の仏であり、それがあなたを救う。」

女は腕の中で震えていた。真魚はよりいっそう力を込めて彼女を抱きしめた。

「忘れるな。あなたの心の中に仏はいる。」

真魚はしばらくの間、女を抱きしめていた。

三章（後書き）

いわゆる宗教的な話になってきました。ご意見ご感想、そしてご批判がございますれば遠慮なく『感想』にお書きください。

四章（前書き）

残酷な描写があります。

四章

夕暮れの朱雀大路を、真魚はどこか上の空で歩いていた。

結局、女には懐に入れていた少しばかりの小銭を全て与えた。彼女は困っていたがそれで二、三日だけでも食えることができるなら受け取れ、と手に握らせた。

それだけだった。

それしかできなかった。

—どうして裕福な奴等と貧しい奴等がこの世にいるんだ！

彼女の声が耳について離れなかった。

真魚は立ち止まって自らの衣服を見る。絹ではないが、粗末な衣服でもなかった。毎日洗濯して毎日きれいな衣服を着ることができた。髪も毎日解いて毎日結うことができた。汗をかけば風呂に入ることもできた。

そして、毎日朝、夕の食事を欠かさず口にすることができた。

真魚の父、佐伯善通さえきのよしみちの位は、直あたであり、叔父、阿刀大足あとのおたりのそれは、宿弥すくねである。決して高くはない身分だがまず食べるのに事欠かなかった。大安寺だいあんじに向かう通りでいつも目にする、道端で食物を求めて手を伸べてくる痩せこけた人々を思い出した。

—あの中に明日は死んでいる人がいるかもしれない。
思ったとたん、真魚は震えた。

—何故。

真魚は両手で顔をおおう。

—何故この世に、あんなに貧しい人がいるのか。

そのときだった。後ろから軽いざわめきが聞こえてきたのは。振り返ると、貴族の乗る車がやってくるところだった。

民は朱雀大路を歩く足を一瞬止め、そしてその貴族のために道を開ける。

真魚もまた、道を開けて目の前を通りすぎる貴族の車駕くるまを眺めた。

豪華な車駕だった。ちらほらと金の装飾が見え、色鮮やかな飾りが屋根から垂れ下がって揺れに従ってしゃん、と音を立てる。ほぼ全体に、螺鈿細工らでんが施されており、材木はおそらく南の島でしか取れない紫檀したんだろう。いや、それは大変貴重な木だから、紫檀に見せかけた木材なのかもしれない。

それでもその車駕はけっして庶民には触れることのできない、真魚の父親でさえ手に入れることのできない高価な代物である。

真魚は冷淡な目付きでそれを見た。

それはあまりにも貧富の差をあらわにし過ぎていた。

この一週間、真魚はほとんど気が抜けたように過ごした。大足おおたりは、はらはらと心配していたがとても事情を説明する気になれなかった。大学が休みのこの日、真魚は自室にこもって板敷きの床に座りこんでじっとしていた。

以前自分に身体を売ろうとした女と道端に横たわる貧しい民たち、それに対して高価な乗り物に揺られて朱雀大路を堂々と行く貴族。

―そして。

大安寺だいあんじの虚空蔵菩薩こくうざうぼさつ。

真魚の頭の中はそれらでいっぱいであり繰り返し繰り返し思い出されていた。

目を閉じると、女の声が聞こえる。次いで道端の貧しい民の姿が見える。次いで豪華な車駕くるまが装飾を光らせて通りすぎる。そして、虚空蔵菩薩が穏やかな表情で自分を見つめている。

―自分はこのままでよいのか？

真魚は思った。このまま家族や親戚の期待通り大学を出て、官吏になって佐伯家を継ぐのか？そして朝廷に仕えるのか？

そんな将来を思い描いて、真魚は深くため息をついた。

―自分は官吏に向いていないのではないか？

あの豪華な車駕を思い出して、そう思った。

真魚は立ち上がった。

無心に、あの虚空蔵菩薩を拝みたい衝動にかられた。

部屋を出て大足に出掛けてくると言いおいて、大安寺へ向かった。

朱雀大路からは日に日に人の姿が減っていく。皆、長岡京へ移っているのである。

だんだんと閑散としてくる旧都を、真魚は少し寂しい思いで見た。再び橘の実を買って、朱雀大路を南へ下っていく。知らず知らず真魚の足は早くなっていった。

―早く、虚空蔵さまにお会いしたい。

左京へ入ってから走った。何故か大安寺が光りに思えた。そこに行けば自分の本当の生き方を見つけられるかもしれないと思った。

しかし、現実残酷だった。

真魚は角を曲がろうとして、たたらを踏んだ。その角から荷車を引いた役人たちがやって来て、真魚が飛び出してきたせいであわてて止まって荷車が横に傾いてしまった。そして荷にかけていた藁わらと荷車の隙間から、人が転げ落ちた。

真魚は一瞬硬直した。それは死体だった。そしてよく見るとその遺体が、一週間前真魚に身体を売ろうとした女のものであることに気づいて、真魚は目を見開いた。

「何をしている！」という役人の声は聞こえなかった。真魚は急いでその女の遺体を抱き起こし、よくよく顔を見る。あの女に、間違いなかった。

「……何故……？」

真魚は呆然とつぶやいた。

―あれしきの金では命をつなぐことができなかったのか？

女の顔は痩せこけてくぼんでおり、顔色は土気色をしていた。

―つい一週間前までは確かに生きていたのに！

やりきれない思いが真魚の心にあふれた。

真魚は唇をかんで深く頭を下げた。

「すまぬ……！」

別に真魚自身が殺したわけではないが、とにかく謝りたかった。目をつむって、涙がこぼれ落ちるのを震えながら耐えた。

「おい。」

役人の一人が真魚に声をかけた。

「お前、この者と知り合いか？」

怪訝そうに問うてくる役人に、真魚は静かに首を振って、遺体を荷車に横たわらせた。女の身体はあまりにも軽かった。

役人たちはそれを見届けて再びその遺体に藁をかける。胡散臭そうに真魚に一瞥^{いちべつ}をくれて荷車を引いて行った。

真魚は、その遺体に向かって合掌した。

踵を返して思い至る。

―あの女には娘がいるのではなかったか！

真魚は慌てて周囲を見渡した。どこかに娘らしき童女（子供）がいないか。

すると、先程荷車がやってきた角から、かん高い童児（子供）の泣き声が聞こえてきて、真魚はよろめくようにその先の角を曲がった。

ボロをまとった童女が、泣き叫んでいた。歳のころは十くらいであろうか。小さな体が碎けてしまいくらい大声を上げて泣いていた。

「はっ、かかさまああ！」

真魚はその子を見て立ちすくんだ。必死に母を呼ぶ小さな童女は、もはや誰にすぐることもできないのだ。

真魚はその子に近づこうとした。すると真魚の存在に気づいた童女は、泣きながらおびえた目で逃げるように後ろに退いた。

「まっ、待ってくれ！」

真魚はその子に声をかけた。童女は一瞬体を震わせて立ち止まる。

「あの女人の、娘さんか？」

その場にひざまづいて童女に目を向けると、その子は立ち止まって涙を流しながら小さくうなずいた。

「おれは君の母君に会^おうたことがある者だ。」

真魚が童女に言う、その子は涙をぬぐって小さな声で言った。

「……かかさまに会ったことがある？」

「うむ、そうだ。」

真魚がはつきりうなずくと、童女はゆるりと近づいてきた。真魚は、何も言わずにひざまずいたまま、その子が近づくのを待った。

少し距離を置いて童女は真魚と面と向かった。

真魚は首を傾けて、童女に言った。

「…母君のことは、残念だった。」

言う、童女は再び泣き出しそうになる。真魚はすかさず言葉を次いだ。

「おれは、真魚、という。君は？」

童女は涙を流しながら言った。

「……みちよ…。」

「みちよ、か？」

問うと、こくんとうなずく。真魚はそろそろとみちよに近づいた。そして目線を合わせる。

「みちよ、その名が、どういう字を書くのか、分かるか？」

この問いにも、こくんとうなずいた。真魚は少しだけ笑みを浮かべて、地面に指で文字を書いて見せた。

「おれの名は、真、魚。」

真魚はみちよによく見えるように逆さに文字を書いた。その『真魚』という文字を、みちよは大きな瞳で見つめた。そしてその瞳で真魚を見据える。真魚は幼い眼を見つめた。みちよは首を傾げてしゃがむ。真魚の字の隣に、指でたどたどしい文字を書き始めた。

『道世』

真魚は微笑んだ。

「道世、か。良い名だな。」

道世は涙に濡れた瞳で真魚をひたと見た。

「…真魚、かかさまにお金くれた？」

道世の問いに真魚は少しばかり驚いたが、すぐにうなずいた。

「ああ。……すまぬ、道世……。ああするしか、なかったんだ。しかし、結局、死なせてしまった……。おれは、何もできなかった……。」

息をつきながら真魚が言うと、道世は再び泣き出した。かかさま、かかさま、と声を張り上げて泣きじゃくり、やがて真魚にしがみついていた。

真魚はその小さな身体を抱きしめてあげた。せめてこの子の悲しみの半分くらいは受け止めてやりたかった。小さな命は、今、川のように涙を流して悲しみをあふれさせていた。

真魚は道世の手を取って、朱雀大路を北へ向かって歩いていた。

道世はしくしくと泣いたままである。

やがて歩き疲れたのか、ぺたんと地面に尻をつけた。

「真魚…、つかれた。」

そう言ってみ上げてくる道世が愛しくて、真魚はそうかと言って大路の脇に寄って、二人で地に座った。

真魚はふと懷に手を入れる。橘の実を取り出した。笑んで、道世に差し出すと喜んでほうばり始めた。

「皮をむかないと食べられないぞ。」

言って、道世から取り返すと皮をむいてやる。改めて差し出すと、道世は実に美味そうに食べていた。その様子を見て、たまらない憤りが込み上げてきた。―この世ではこんな小さな童児（子供）が満足に食べることができないで生きているのか？

「……真魚、おこってるの？」

道世の大きな目が怯えていて真魚は目を見開いた。

「いや、何でもない。怒ってなどいない。」

何度も首を横に振って否定して見せると、道世は安心して再び実をかじりはじめた。

真魚は喜怒哀楽が顔に出やすい。気を付けねば、いつも思う。

道世は実を全て食べ終わると真魚に向かって、「ごちそうさま。」と手を合わせた。それを見て真魚は微笑んで道世の頭をなでた。

「良い子だ。」

言うと、道世ははにかんだように笑った。

やっとこの子の笑顔が見れた、と思ったとたんすぐに笑みが消えてしまった。そして道世は眉を寄せて膝を抱え込んだ。

「……真魚？」

「どうした…？」

心配して聞くと、道世は真魚に視線を合わせた。

「悲田院^{ひでんいん}ってどんなところ？」

不安を隠しきれない大きな瞳に、真魚は唇を引き結んで道世の肩を抱いた。

五章

悲田院。ひでんいん

まだこの平城京が都として栄えていた頃、聖武天皇の皇后である、光明皇后が、施薬院せやくいんと併設して設立された、孤児や老人らのための施設である。

光明皇后は、大化改新において権勢を奮った中臣鎌足が、盟友である天智天皇こと中大兄皇子より、藤原の姓を賜ってそしてその藤原鎌足の二男である藤原不比等が、橘三千代たちばなのみちよに生ませた藤原家の三女であった。

彼女は自らを藤三娘とうさんじょうと著して、生家である藤原家をもり立てようと権勢的であったが、半面、慈悲深い人柄だったと云われている。

自らが設立した悲田院と施薬院では、病人の看護をしたり貧しい民に食事をさせたりしておられたという。

その悲田院が今日においても残されており、孤児や老人たちが住んでいる。

真魚は道世みちよに悲田院について説明した。

しかし道世から不安が消え去ることはなく、膝を抱えてうなだれてしまった。

無理もない、と真魚は思う。つい先程母親と死に別れたのだ。その悲しみが胸にあふれているときに見知らぬ所へ連れていかれるのである。

しかしこうするしかないのである。すでに道世は天涯孤独になっってしまったのだから。まだ幼い童女（少女）は母親以外に家族や親戚をもっていないかった。その母親も亡くなってしまった今、悲田院へ入るのが一番良いことと思われた。

だが道世は真魚が思ってもいないことを口にした。

「真魚といっしょにくらすのだめ？」

体を丸めて、道世はすがるような瞳を真魚に向けて揺らめかせた。
真魚は一瞬目を見開いて硬直した。

「……それは……。」

何と応えれば良いのか、真魚の頭は混乱した。道世は大きな瞳で真魚を見据える。不安と期待とが入り混ざった眼だった。

真魚は道世に対して面と向かった。

「道世、すまぬがそれはできない。」

「どうして？」

「おれは道世の親にはなれないからだよ。」

「道世は真魚のこと、おやおもっていない。あにさまとおもってる。」

「兄様……。」

道世をなんとか説得しなければ、と真魚は言葉を探し続けた。

「…道世、悲田院にはな、道世みたいな子がたくさんいる。だが皆一所懸命生きている童（子供）たちだ。悲しいことや苦しいことがあっても楽しいときは楽しんでるし、うれしいときは笑っている。……もちろん道世は今はまだ悲しい。しかし、その子たちと仲良くなって遊んで、勉強して、この世を精一杯生きてゆけるようになる、道世なら。」

言って、真魚は宙に文字を書く。

「『道世』。良い名だ。世の中の道を、道世自身の道を、悲しいことや苦しいことがあってもそれらを乗り越えて、行ける。」

「その分、楽しいことやうれしいことが必ずある。…どんなところに住んでいようと。」

真魚は道世の頭をなでて、言った。

「おれの言うことが分かるか？」

道世はじつと真魚を見つめている。やがてその瞳から涙が流れた。

「道世……。」

真魚は道世を抱き締めてその背をなでてあげた。

すると道世は嗚咽の間に小さな声でしゃべりはじめた。

「…道世は…、こちらのなかにほとけさまが、いる。」

言って、真魚の腕の中で小さな手を胸に当てた。

「かかさまが…、おしえてくれた。」

「…道世。」

真魚は驚いた。ではあの女は、この子の母親は、真魚の言ったことを信じ、そしてそれを娘に教えたのだ。真魚は道世の頭をなでた。

「そう、そうだよ…、自分を信じてごらん。…きつと、仏様のお声が聞こえるから…。」

「真魚。」

「ん？」

「道世は、道世のことしんじる。だって、道世のこちらのなかに、ほとけさま、いるから…。いなくなっても、道世のことしんじてれば、ほとけさまは、道世のこちらのなかにきてくれる。」

言って、道世は真魚の漆黒の瞳を、涙を流しながら見据えた。

真魚は少しだけ微笑んで見せた。

「…道世の言うとおりでな。君は賢い。」

言って、頭をくしゃくしゃとなでてあげると、道世は顔をゆがめて泣き出した。しがみついてきたので真魚は道世を精一杯抱き締めてやる。

―せめて少しでもこの子の心に暖かさが届くように。

仏がこの子を導いて下さることを信じて。

道世は真魚の腕の中で、心行くまで泣き叫んだ。

道世を悲田院に預けて、真魚は再び大安寺^{だいあんじ}へ向かっていた。

すると前方から貴族の立派な車駕^{くるま}がやってくるのが見え、随従^{ずいじゆう}たちが声を上げているのが分かった。真魚は眉をひそめてそちらへ歩いていく。

「退け！」

随従が叫んだ。それとともに民たちがあわてて貴族のために道を開

ける。

やがてその車駕は真魚の前までやってきた。随従は叫んだ。

「退かぬか！春宮大夫、藤原葛野麻呂様のお通りである！」

真魚はさらに眉をひそめて道を開けた。

―春宮大夫、ということは安殿皇太子の？

春宮大夫は皇太子付きの官吏である。

藤原葛野麻呂の乗る車駕は先日見たそれよりいっそう豪華だった。

それはそうである。なにしろ皇太子付きの官吏の乗る車駕なのであるから。その車駕が真魚の目の前を通るとき、ほのかな木の香りがした。白檀である。車駕の材木の中には白檀が入っていた。さらに螺鈿細工のほかに、唐花唐草文が所狭しと描かれている。ところどころに見受けられるのはペルシア起源の連珠文に双獣文であろうか。……いずれにせよ、豪華には違いなかった。

ふと真魚はむなしさに駆られた。

―こんな立派な車駕に乗っていられる暮らしもいずれははかなく消えてしまうのではないか。

真魚はその車駕から目をそらすようにして大安寺へ足を向けた。

山門前では、すでに勤操が待ち構えるようにしてひっそりと立っていた。

真魚は自分でも不思議なことにさほど驚くこともなく、勤操に近寄って行った。

ひとつの決意をして。

おわび三

空海（真魚）が通う大学はやはり長岡京にある大学であるべきでした。いくつかの文献を見たところ、どれも長岡京の大学に入学した、とありました。それに空海とその叔父の阿刀大足あとのおたりが平城京に住んでいるという設定にしまうと、大足はどうやって伊予親王いよのみこにお仕えしているのでしょうか？！長岡京は平城京から約四十キロの地にあるのだそうです。四十キロです……。大足さん、毎朝どのように宮廷に通ったのでしょうか……。

このようにいまさら自分の歴史無知に自己嫌悪し、設定ミスに後悔しております。読んで下さる方々には伏しておわび申し上げます。しかしながら一から書き直す訳にもいきませんので、このまま続けさせて頂くことを切にお許し願いたいと存じます。

また、以下の文献も参考にさせて戴きます。

あらいゆうせい
新居祐政 著 『苦難と栄光の御生涯と大師信仰 弘法大師物語』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7015x/>

空と海と密との出会い

2011年10月30日01時05分発行